

トランスジェンダー

をいきる

(1 3)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

第 2 次性徴の出現

1 はじめに

体の性別（セックス）と、自己の認識している性別（ジェンダー）の不一致で一番悩ましいのは、第 2 次性徴の出現である。すなわち、私の場合は、自己の認識している性別（男性）とは逆に、体はどんどん女性になっていくことで、自己の認識している性別との間で乖離が生じる。そのことで、心身ともに苦痛を感じる。それだけではなく、周囲からも体の性別（女性）にふさわしい役割を求められてしまう。

では、私の場合は、どのような形で第 2 次性徴が出現し、どのような苦痛が生じたのか。「自己物語の記述」にしたがって論じる。

2 思春期の身体変容

思春期は私にとっては当に「悪夢の時代」、すなわち、第二次性徴に伴う身体変容によって顕在化してきた身体の性別とジェンダーの性別の「不一致」よりも更に深刻な「乖離」へと認識し始めた時期でもあった。

①「胸のふくらみ」による悪夢への序幕式

小学校 6 年生の夏休みのある日の午後、室内で遊んでいたとき、私は微かな胸の痛みとしこりに違和感を感じた。そのとき私は、たまたま小児がんで亡くなってしまった子どもの本を読んで

いたので、(もしかして、自分の体にもがんが発症したのでは) と思い、一瞬顔が蒼白になった。そして、その日の夜、母に胸の痛みとしこりへの違和感を訴えた。すると、母から返ってきた答えは、私を愕然とさせるものだった。

「あんたも女の子やから、胸が膨らんできたんや。そろそろブラジャーをせんとなあ」

「この母の答えは、単なる胸のふくらみ」を意識させられただけではなく、私に男性ジェンダーから女性ジェンダーへの移行を迫るイニシエーションであり、もはや言葉を差し挟む余地を与えなかった。軌を一にして、このころから、両親や周囲の大人たちからも、私に女性としてのジェンダー役割を強制するようになった。当に、「悪夢への除幕式」であった。

②新たな父からの宣告

悪夢への除幕式に続いて、次に訪れたのはまたしても父からの宣告であった。

子どものころから、父とプロレスごっこをするのが楽しみの1つであった私は、中学校1年生になっても、父にプロレスごっこをせがんでいた。このプロレスごっこは、盲学校の寄宿舎から週末ごとに実家に帰省していた私が、唯一「男の子になれる(もしくはなってもよい)貴重な場」として機能していた。

そんなある日、私は父の異変に気づいた。それは、どんな技でも向かい合って対応してくれた父とは違う、何かよそよそしいムードが漂っていた。そこで私は父に、なぜいつもとは違うよそよそしい態度をするのかについて聞いてみた。すると、父からは予想もしなかった答えが返って来た。私は父からの「予想もしなかった答え」に、思わず涙を流してしまった。

「お前ももう女の子やもんなあ・・・」

この父の答えは、幼少期のころに、「お前は女の子やから、ちんちんは生えてきいひん」という答えと同様、「宣告」という形で私の身に降りかかってきた。しかし、「宣告」の意味するところは、幼少期のころとは違った「神聖かつ厳格な宣告」として自己認識させられた。つまり、自己の女性への身体変容によって、それまで唯一機能していた「男の子になれる(もしくはなってもよい)貴重な場」が、父からの新たな宣告によって奪われたことである。

また、父の前で流した涙というのは、父が自己の女性への身体変容に対して、単に手加減しただけではなく、女性への身体変容によって、ジェンダーの性別を男性から女性へと変更させられたことへの屈辱感であった。そのことが、「一人前扱いされないようになった」こと、つまり、ホモソーシャルな男性同士の関係性から排除されたことを意味した。

③身体化された症状は「不良になりきれなかった自己への消化不良」

小学校3年生から中学校1年生にかけて、盲学校の寄宿舎生活を送っていた私は、女子寮の中でも粗暴な行為と寡黙を繰り返していた。その行動様式が「女の子らしくない」という理由でいじめの対象になった。また、第Ⅲ章で詳述したように、寮母たちからも「母親代わり」と称して、不必要な善意を押し付けられたことに対して反抗していた。

その行動様式は中学校1年生になり、高校の女子の先輩方と同室になってから更に顕著になった。それは、女性への身体変容にしたがって、男性ジェンダーとの間の不一致が更に顕在化し、

自暴自棄に陥ったことでいっそう粗暴な行為と寡黙が強化されていったからである。女子の先輩方とのいざこざが絶えなかったことを理由に、中学校2年生から電車通学に切り替え、最寄り駅で同じクラスの女子の友達と待ち合わせて一緒に盲学校に通うようになった。

そのころのクラスは、私を含めて女子ばかりの4人、担任は女性教師という、私にとっては当に、女の園の中に、男が一人ぼつんというような状況であった。そのために、寄宿舎での生活と同様、クラスの中でも浮いた存在、つまり、「空気を読めない逸脱した存在」として扱われ、いじめの対象になった。また、クラスの中で何か事件が起こる度に、いつも担任の女性教師からの叱責のターゲットにもなっていた。そのような女性たちからの扱いに対して、いつも「粗暴な行為と寡黙」という決まった行動パターンで自己の感情を言葉にすることなく、男らしく封印してきた。

しかし、「男らしく封印してきた感情」は、思わぬ手段で自己の身体に警告を発するようになった。ある日、いつものように友達と電車通学していたとき、突然下痢や腹痛に襲われた。その日は学校を欠席し、家に引き返して病院で診察を受けたが、異常は見つからなかった。それ以後、ほとんど毎日のように、いつも決まった駅で下痢や腹痛・時には嘔吐を催して途中下車を余儀なくし、場合によっては学校を欠席した日も出てきた。

そのような症状に悩まされ、途中下車して学校を欠席し、家に引き返した私に、祖母は、「何で引き返してきたんや、お前はそんな弱虫やったんか」と罵倒した。私は、祖母から罵倒される度に、「ああ俺は何でこんなに「男らしくない」んか」って嘆くしかなかった。

祖母は私がクラスや担任の女性教師からいじめられていたことは知っていたものの、そのような逆境に耐えることこそが「女の子」であり、将来独立するための試金石であると思っていたのだろう。ところが、祖母の私への女の子としての役割期待をすべて「男の子」に代入していた私にとっては、祖母からの「弱虫」という言葉、女性たちからいじめられたことによる腹痛や下痢などの身体化された症状が出現したこと、その身体化された症状に屈して学校を欠席したこと、更には、女性への身体変容と、男性ジェンダーとの間をうまく統合できずに悶々としている自己に対する「弱さ」が、そのまま「男らしくないこと」と認識し、ますます自暴自棄に陥った。

また、祖母罵倒されたことによって、このような身体化された症状が、登校拒否を表していることにもうすうす気づいていた。しかし、登校拒否をすると、ますます女性たちからのいじめへの敗北を意味するので、男らしく耐えていた。そこには、「男は攻撃されないもの」、あるいは、「まして、男が女から攻撃されるなんてありえない」、「攻撃される男に問題・欠陥あり」など、「男は攻撃しても攻撃されない」という思い込みが内面化していたのだろう。

そのような心性の下、私は自ら「不良になりきれない自己」に直面した。当時、「不良」をテーマにした歌やドラマなどのメディアの影響もあって、「不良」に憧れていた。そこに描かれていた「不良」とは、粗暴な行為に加え、多弁で反抗的な口調、序列意識の厳格化などであり、女子ばかりのクラスの中や担任の女性教師の前で発揮してみたい行動様式であった。しかし、現実はいえ、「粗暴な行為」のわりに「寡黙」によって感情を封印していたために、根っからの「不良」になりきれなかった。その代わり、腹痛や下痢・嘔吐などの身体化された「消化不良」が出現したことは、私にとっては皮肉な結果であったと言わざるを得ない。

④身体化された症状のもう 1つの側面

中学校 3 年生の夏休み前、原因不明の高熱に襲われ、学校を欠席した。その 2 日後、ついに「あってはならないこと」が自己の身に起きてしまった。

他の女子より遅ればせながら、私にもついに「初潮」が来訪した。それは、今まで味わったことのない「有無を言わせぬ身体感覚」で、私に男性ジェンダーから女性ジェンダーへの変更を迫る現象として、いっそう明確に突きつけられた。

前項で述べたように、腹痛や下痢・嘔吐などの身体化された症状は、確かに登校拒否の症状としての役割を果たしていた。その一方で、この身体化された症状は、初潮来訪に対する拒否反応の前段階としての役割をも果たし、「原因不明の高熱」は、いよいよ初潮来訪を警告するとどめの症状であったと理解することができる。

よく、「初潮になったら赤飯を炊いてもらう」という話があるが、私の場合はどうだったか、覚えていない。よほど、初潮来訪への違和感や拒否感が鮮明だったのだろう。

⑤レイプ・妊娠への妄想に悩まされる

初潮を最後に、女性への身体変容が完了すると、今度はレイプ・妊娠に対する妄想に悩まされた。

高校生のころ、交際していた男性がいたとはいえ、親密な関係性を構築するまでには至らなかった。ただし、交際していたとはいえ、決して自身が女性として、相手の男性を好きになったのではなく、男性として相手の男性を好きになっていたのも、ジェンダーレベルではゲイである。それにも関わらず、当時視聴していたドラマの 1 シーンで、レイプされた女性が妊娠してしまった場面への強烈なショックが引き金になり、それ以来、レイプ・妊娠に対する妄想に悩まされた。さらに、そのレイプされ、妊娠してしまった女性の身体と自己の体との距離を適切に取ることができずに、このレイプ・妊娠の場面を直に感じてしまったことへの恐れ、つまり、実際はレイプされたり、妊娠させられたりしていなくても、いつ自己の身に降りかかるかという予期不安が重なった。それは、ジェンダーレベルで「男が妊娠するなんてあってはならない」という強固な思い込みも手伝って、完了した自己の女性の身体を否定しつつも、現実にはレイプ・妊娠する可能性を否定できないことへの予期不安に悩んでいる自己に対する「男らしくない」という否定的感情が、更に妄想を強化していった。そこには、盲学校教育の中で教えられた保健体育などの授業で、「女は妊娠する」という内容を自明として受け止めていたことも関与しているだろう。

⑥私にもちょっとした「変声期」が

最後に、私にとって残酷だった第 2 次性徴の中でも、ちょっとした「嬉しいエピソード」を紹介しよう。

中学 1 年の音楽の時間に合唱をしているときである。合唱のパートを選ぶときに、先生が突然私に言った。「あれ！もしかして変声期？」。そのとき、私は「まさか」とは思いながらも、他の女子とは違って、自己の声が少しずつ低くなってきてるんだらうか、と思い、にやにやしてしま

った。女子にも多少の「変声期」があるというのは当時知ってはいたものの、他の女子とは異なって、自己の「変声期」が、音楽の先生である他者に気づかれていることへの優越感を覚えたことを今でも覚えている。

3 終わりに

第2次性徴に差し掛かったとき、誰しものが少なからず「戸惑い」を覚えるだろう。その現象は、男女に関わらず同じであろう。問題は、私のように、体の性別と、自己の認識しているジェンダーの性別が不一致である場合、この第2次性徴とどのように「付き合うか」である。

今回は、FTM トランスジェンダーの自己の恋愛または恋愛感情のあり方について記述する。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）